

第4回日本色彩学会論文賞

企業における色彩研究の未来

—第4回日本色彩学会論文賞を受賞して—

Future Strategy of Color Research in Private Company

—Receiving 4th CSAJ Research Award—

吉川 拓伸

株式会社資生堂, 千葉大学

Hironobu Yoshikawa

SHISEIDO CO., LTD., Chiba University



この度は、第4回日本色彩学会論文賞に我々の論文を選んでいただき、大変ありがたく光栄に存じます。全国大会発表時や論文投稿時に熱心にご指導していただきました日本色彩学会の諸先輩方、肌色測色に協力いただいた株式会社資生堂のみなさまに、著者を代表して厚くお礼申し上げます。

日本色彩学会誌 Vol.34, No.2 (2010)に掲載されました受賞論文「1990年代における日本人女性の肌色変化」は、共著者である棟方氏が1990年代の初頭に、私が1990年代の終わりから2000年代の初頭にかけて取得した大量の肌色データを統計的に解析し、1990年代の10年間に日本人女性の肌色が、黄みよりで高明度、低彩度に変化したことを明らかにしたものです。この肌色変化は1990年代初頭に、紫外線の有害性が認知され、日焼けに対する意識が急速に変化し、日焼けをしなくなった為であると考察しています。また、30歳代の変化が最も大きく、女性の社会進出に伴うライフスタイルの変化も肌色に影響していると推測され、肌色は「時代の価値観を映し出す鏡」であると強く認識しました。

この原稿を書くにあたり、論文の執筆過程を振り返っていたところ、民間企業における今後の色彩研究の進め方が見えてきたように感じています。

化粧品メーカーでは化粧品や化粧法の有効性を検証するため、しばしば対象者を集め、その肌色を測色します。得られたデータは本来の目的である有効性の検証に使われた後は、ハードディスクの奥深くにしまわれ、そのまま忘れ去られることが多いのが現実です。本論文はこのような様々な目的のため取得した肌色データを、「何か面白いことが見つかるのでは？」という好奇心から解析を始めることで得られた成果です。このような変化が起こると分かっていたわけではないので、変化の前後に同条件でのデータを大量に取得できていたのは単なる幸運です。ただし、そ

のデータも適切に保管しておかなければ、また、「既に終了した業務のデータを引っ張り出す」というモノ好きがいなければ日の目を見ることはなかったわけです。民間企業では色彩は商品の一機能であると認識されていることが多いため、純粋な色彩学の研究・開発は行いにくいとは思いますが、この論文を通じて、その気持ちさえあれば他の分野の業務や研究の中からでも色彩学に発展させることができるということを身をもって感じました。

また、本論文の元になった研究は、新聞等のメディアでも取り上げてられました。そして、その記事が個人のブログや電子掲示板サイト「2ちゃんねる」にも広がりました。もともと「面白いこと」をキーワードに始めた研究でもあり、「自分でも日焼けを避けるようになった」、「周りの人の肌が白くなった」という実体験との共感が得られたため、一般の方々にも興味を持ってもらえたのでしょう。結果として、日本色彩学会ならびに色彩研究を広く認知してもらえたことは非常に良かったと思っています。研究は必ずしも万人に理解・共感されるとは限らず、されやすいものとそうでないものに分類されると思います。本論文の内容がWebで広がっていく様を目の当たりにし、特に企業においては、理解・共感されやすいものをうまく見極め、バランスよく研究を行い、戦略的に広報していくことが重要であると感じました。その結果、周囲への色彩研究の認知向上や自身の色彩研究に対する環境整備につながるのではないのでしょうか？

色彩はほとんど全ての産業に関与しているにもかかわらず、民間企業所属の学会員は少ないと感じています。そのため、今後一層の精進により「面白い」研究成果を発信し、企業における色彩研究を盛り上げ、日本色彩学会の発展につなげなければならないと身が引き締まる思いです。